

平成21年4月17日現在

研究種目：基盤研究 (B)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18401044  
 研究課題名 (和文) 欧米の人類学映画・写真に見えるアイヌ文化のイメージについての研究  
 研究課題名 (英文) Study of the Ainu images on the western ethnographic materials  
 研究代表者  
 内田 順子 (UCHIDA JUNKO)  
 国立歴史民俗博物館・研究部・准教授  
 研究者番号：60321543

## 研究成果の概要：

本研究は、アイヌ民族の文化を対象に撮影された欧米の人類学映画・写真のコレクションについて、撮影や編集、日本国外へ送られた経緯などについて豊かなバックデータを有するニール・ゴードン・マンローのコレクションを中心に調査を行い、デジタル化による収集を行う。そして、本コレクションに関わる映画・写真の所蔵情報とその相互関係を明らかにし、イメージの複製や引用によって、アイヌ文化がどのように再生産されてきたのかについて考察する。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
19年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
20年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：文化人類学・民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：アイヌ、写真、民族誌映画、マンロー

## 1. 研究開始当初の背景

ニール・ゴードン・マンロー (1863-1942) は、1890年に来日したスコットランド出身の医師で、考古学的な関心からしばしば北海道で調査をおこなっていた。1932年からの晩年の10年間は、北海道沙流郡平取町二風谷に居を構え、医療活動に従事しながらアイヌ文化の研究をおこなった。

その過程で収集された器物類、写真、映画、原稿などの資料は、随時イギリスに送られ、現在、国立スコットランド博物館 (以

下「NMS」とする)、オックスフォード大学ピットリバース博物館、大英博物館、イギリス王立人類学協会 (以下「RAI」とする)、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (以下「LSE」とする) のほか、日本では、北海道開拓記念館 (以下、「記念館」とする)、国立歴史民俗博物館 (以下「歴博」とする)、北海道大学北方生物園フィールド科学センター植物園 (以下「北大植物園」とする) などに収蔵されている。

器物資料については、平成14年度に

開催された「海を渡ったアイヌの工芸－英国人医師マンローのコレクションから」(財団法人アイヌ文化推進機構・研究推進機構 アイヌ工芸品展)によって全体像が明らかにされたが、写真や映画、文書類については、部分的な調査・紹介がなされているにとどまっていた。

## 2. 研究の目的

(1)日本とイギリスの博物館、大学、研究機関に所蔵されているマンロー関係の写真・映画と、そのバックデータを含む文書類の調査を行い、デジタル化による収集をして、所蔵情報と、映画・写真の相互関係を明らかにする。

(2)「アイヌ文化」がイメージとしてどのように欧米に輸出されてきたのか考察する。

## 3. 研究の方法

(1)マンローのアイヌ研究に関する写真・映画・文書は、日本では歴博、記念館、北大植物園に、イギリスでは RAI、LSE、NMS に所蔵されている。それぞれが、どのような資料を所蔵しているのか、また、デジタル化が可能な状態であるか、可能であれば、どのような方法でデジタル化することがよいか、検討する。

(2)それぞれの所蔵機関とデジタル化の可能性と方法について検討をおこなう。

資料の劣化が進行し、現状ではデジタル化が不可能であると判断された資料は、当該資料の所蔵機関の判断で資料の修復をおこなった上でデジタル化する。

デジタル化の作業は、研究代表者の内田(進行管理等)、研究分担者の宮田(撮影/スキャニング/現像/データチェック等)、研究協力者の勝田(撮影等)、研究補助の城石(撮影助手/スキャニング/現像/データチェック等)によりおこなった。

使用した主な機材は以下の通りである。

### 【撮影】

Nikon D200  
Kodak ProBack  
Phase One

### 【スキャニング】

Epson GT-X900  
Epson GT-S600

(3)取得したデジタルデータを整理し、試験的に統合的なデータベースを作成して、

研究代表者と研究分担者とで関連資料の比較をおこなう。

## 4. 研究成果

(1)本プロジェクトによってデジタル化された資料は以下の通りである。

記念館：写真(ランタンスライド) 100点  
北大：映画フィルム(35mmフィルム・16mmフィルム) 17点

RAI：文書類(論文・手紙等) 1409点  
写真(プリント・ランタンスライド等) 687点

NMS：文書類(論文・手紙等) 1453点  
写真 174点

・歴博が所蔵している写真ネガ(ガラス乾板・ニトロセルロースフィルム)は、すでに同館によりデジタル化されており、本プロジェクトの目的で使用するには十分な質のものであることから、再度のデジタル化をおこなわない判断をした。

・LSE所蔵の写真および文書については、同機関自身がデジタル化をおこなう予定であり、その作業が済んだ後、データの提供をうけることになった。

・北大植物園の映画フィルムでは、本プロジェクト開始時には存在が確認されていなかった16mmフィルムが同園の調査によりその存在が確認された。同園の協力により、本プロジェクトにおいて調査およびデジタル化をおこなうことができた。

・NMS所蔵の関連文書は、劣化等により、そのままではデジタル化の作業ができない状態であったほか、資料番号が確定していなかったため、NMSと検討した結果、NMSにおいて文書の修復と整理を進め、その作業が完了してからデジタル化をおこなった。

(2)歴博、記念館、北大、RAI、NMSが所蔵するマンロー関係の写真、映画、文書の全容が確認できた。

(3)(2)により比較研究をおこなう基盤が得られた。本プロジェクト期間内に進められた比較研究においては、以下のことが明ら

かになった。

- ・歴博が所蔵するネガの中には、記念館のランタンスライド、RAIのプリント写真のようになったネガと見られるものが含まれていることが明らかになった。今後のデジタル化の方法の発展により、歴博のネガから、プリント写真では得ることができないような詳細な画像情報（たとえば刺繍のステッチや自然景観など、プリント写真で高精細なデジタル化を行っても詳細な情報が得られない部分など）が取得できることも予想される。
- ・北大植物園で新たに存在が確認された映画フィルムは多くは、リバーサル・フィルムであった。リバーサル・フィルムとは、撮影して現像したフィルムを上映用のポジフィルムとしてそのまま使うことができるものである。つまり、マンローが撮影した素材そのもの、1次資料が残っている、という点で、歴博のネガとあわせて、たいへん重要なものであると言える。また、歴博、記念館、RAIが所蔵する写真と関係の深い映画フィルムが存在することが確認できた。たとえば、ひとつの儀礼を、映画と写真の両方で撮影したものなどである。映画と写真の両方が存在することで、撮影現場の状況に関する情報が補えるものも存在しており、マンローの撮影方法やアイヌ民族との関係性などについても考察することができる資料であることが明らかになった。
- ・記念館のランタンスライドは、おそらくマンローが学会発表や講演に用いるために作ったものと考えられる。このことを明らかにするためには、今後の調査・研究が必要であるが、仮にこの推測のとおりだとすれば、マンローがアイヌ文化のどのようなところに関心を持ち、どのように説明しようとしたのか、画像から考察できる資料となり得る点で興味深いものと言えよう。
- ・RAIが所蔵するプリント写真では、一枚一枚の裏面に、マンロー自身による写真の説明が記入されていることが最大の特徴である。歴博が所蔵するネガや記念館が所蔵するランタンスライドには、マンローによ

る説明がまったく残っていないため、単体では何のために撮影したのかよくわからないものもあった。RAIの写真プリント裏面の解説により、撮影内容についての情報を補完することができる点で、大変重要な資料であることが明らかになった。

- ・RAIは、写真のほかに、マンローがアイヌ研究の成果として執筆した論文の草稿や、人類学者チャールズ・セリグマンにあてた手紙を所蔵している。とりわけ、手紙には、映画の撮影、編集に関わる事柄や、写真についてのさらに詳細な説明が含まれており、RAIの写真だけではなく、歴博、記念館、北大植物園が所蔵する関連資料の分析にとっても極めて重要な資料であることが明らかになった。たとえば、撮影年代、撮影の目的、撮影方法、撮影機材、撮影協力者、撮影の経費などが具体的に明らかになったほか、これらの点について今後調査・研究を進める上での手がかりが得られた。
- ・NMSが所蔵する写真・タイプおよび自筆の文書は、多くが、マンローの考古学的研究や哲学的研究に関するものであることが明らかになった。アイヌ文化に関連する資料は少ないが、マンローがなぜアイヌ文化の研究へ進んでいったのか、どのような思想的背景の上でアイヌ研究を展開していたのか考察する上で重要なものと言える。また、釧路考古学会との関連を示す写真・文書も存在することが明らかになった。

(4) 写真、映画と、そのバックデータとしての文書類を統合することで、1900年代初めから30年代までの間に、マンローがヨーロッパに、アイヌ文化のイメージをどのようなものとして伝えようとしていたのか考察することが可能になった。

ヨーロッパでは、19世紀の後半から、アイヌ民族はヨーロッパ人に起源を有する民族であるという認識が広まり、アイヌとヨーロッパの人々の頭蓋骨の比較などがなされていた。マンローが撮影した写真には、アイヌの人々の身体的特徴を計測する目的で撮影されたものが少なからず存在することから、当時のヨーロッパの人類学の関心が影響していると考えられる。

一方でマンロー自身は、悪霊払い（ウエ

ポタラ)などの呪術宗教的な儀式や、ことばや音楽などに反応する精神・身体的な現象(イム)に深い関心を寄せ、写真と映画を使って、その現場を克明に記録しようとしている。

マンローは、1930年に撮影した熊送り儀礼(イヨマンテ)の映画を完成させてイギリスに送ったが、イヨマンテよりも、ウエポタラやイムなどの呪術宗教的な儀式の記録映画のほうが、人類学的に重要だと考えており、くり返し、映画での撮影に挑戦していた。

しかし、精神性が表れるこうした儀式や現象を撮影するためには、撮影される人々との信頼関係が何よりも必要である。RAI所蔵の手紙には、アイヌ民族との信頼関係の形成に非常に深い注意をはらっていたマンローの姿が読み取れる。セリグマンの助言のもとで、性急な一般化を避け、地域ごとの多様性をもつアイヌ文化を克明に記録しようとする姿勢は、写真や映画の撮影においても貫かれていると言えるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[その他]

内田順子「映画の検証ー“AINU Past and Present”からアーカイブへ」、第30回日本映像民俗学の会、2008年3月22日、於：沖縄大学

内田順子「映像を解釈する権利とアーカイブズーアイヌ民族との共同研究の事例からー」、映像社会学研究会編『ポピュラーカルチャーの映像資料作成と編集・教材化・公開にかかわる方法論研究』(平成17-19年度科学研究費補助金研究報告書)、pp.54~56、2008年、京都大学文学研究科社会学研究室

内田順子・貝澤耕一「〈マンロー関係資料デジタル化プロジェクト〉記録を活かすために」、第22回北方民族文化シンポジウム報告書、pp.53~58、2008年、財団法人北方文化振興協会

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

内田 順子 (UCHIDA JUNKO)

国立歴史民俗博物館・研究部・准教授  
研究者番号：60321543

### (2) 研究分担者

宮田 公佳 (MIYATA KIMIYOSHI)  
国立歴史民俗博物館・研究部・助教  
研究者番号：50342605

### (3) 連携研究者

出利葉 浩司 (DERIHA KOJI)  
北海道開拓記念館・学芸部・研究員  
研究者番号：40142088

手塚 薫 (TEZUKA KAORU)

北海道開拓記念館・学芸部・研究員

### (4) 研究協力者

勝田 徹 (KATSUTA TORU)  
国立歴史民俗博物館・管理部・博物館事業課・専門職員

### (5) 研究補助

城石 梨奈 (SHIROISHI RINA)  
お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科・人間発達科学専攻・博士後期課程